アンカースクール

Men'sheviki

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
アンカースクール

【Ｎコード】
Ｎ１６２９ＢＡ

【作者名】
Ｍｅｎ'ｓｈｅｖｉｋｉ

【あらすじ】
県内有数の進学校、Ｓ高に通う生徒たち。その想いが交差するとき――

プロローグ（前書き）

初投稿のクセして複数の主人公のストーリーを書こうとするＭｅｎ'ｓｈｅｖｉｋｉです（笑）
文才もなにくそと言わんばかりにありませんがどうぞ、あたたかい目で見守ってやって下さい……
更新は不定期です。まぁ気軽に書ければいいなー、と思っております。
ではっ。

プロローグ

進級してのクラス替え。それに対する考え方はまさに人それぞれだがこれほど複雑な思いをするクラス替えは初めてだった。

確率にして約十パーセント。冷静にそんな理系らしいことが脳裏に浮かんで思わず吹き出す。

二年C組の欄にはその彼の名前が載っていた。御前崎俊樹（おまえざきとしき）。画数が多いのですぐ見つかる。

問題はここからだ。その一つ上に記されていた名前だった。

小沢奈々《おざわなな》。去年の入学式も御前崎の前に居た女子だった――

彼のすぐ傍で女子の二人組がキャーキャー騒いでいる。いや、騒いでいるのは片方でもう一人は割と冷めた様子だった。

どちらにせよ居心地が悪いのには変わりなかった。今はこのいろんな意味で騒ぎに騒いだ場には到底ついていける気がしない。さっさと教室に行くことにした。

＊

「あーっ、あったー！　F組だ！」

友人が自分の名前を見つけて跳びはねるように声を上げる。

「え、どこ？」

「ほら、あそこ」

彼女の指差したその先に大崎琴美（おおさきことみ）の名前を見つけた。

「茜はー？　何組だった？」

「D組だったよ」

琴美はD組の欄に私の名前――今野茜（こんのあかね）を確認すると彼女はへらへらと言った。

「残念っ、同じになれなかったねー」
「いや、なるはずないでしょ。科目選択違うんだし……」
「あ、そうか！」
そう言って笑い出す。これでいて一年の頃の学年末テストの学年順が一桁だったのが今だに信じられない。
「あー、じゃあもう茜と競えないね。受けるテストも変わっちゃうから」
「模試は統一なんじゃない？」
「そうかも。まぁいいや」
まぁ……いいのか。確かにクラス替えだというのに早々テストの話をするのはどうかと思えた。
「そろそろ教室行こっか」
「そだね」

二学年の教室は理型と文型で階が違う。琴美とは階段の所で別れることになった。
一人で階段を上っているとトイレから出てきた三年生の男子とすれ違った。ハンカチで手を拭きながら頼りなく階段を降りていく。
少なからず好感を覚えた。ハンカチを持っている女子は全く珍しくないがハンカチを持っている男子は珍しい。
「あら、茜じゃない」
階段を上り終えてすぐ目にしたのは小中高ずっと同じ学校に通っている安房涼子（あわりょうこ）であった。長年の悪友だ。今日はツイてないかもしれない。
そんなことを考える私に、
「……ちょっと、ヒドいじゃない。せっかく長年の親友に挨拶してあげたのに」
「朝からいちいちうるさいなぁ……」
十一年目の挨拶なんてこんなものだった。

ところで茜は何組なの？　なんて会話が自然と進む。お互いのことはよく知っているのだ。
「それじゃあ」
「うん、また」
会話を終えた頃には狭い廊下にだいぶ人が混み合ってきていた。立ち止まっていると渋滞を起こす邪魔物扱いされるので塩梅だ。
涼子から振り返ると後ろから来た人にぶつかってしまった。
「あっ――、」
「すいません」
ぶつかった相手はそう言い残してそのまま歩いてゆく。
対して私はあまりの驚きに何も言えなかった。
「全く、気をつけなさいよね」
ぶつかったのを見ていたのか後ろから涼子が言った。だが何も言い返さない私の様子を見て訝(いぶか)しそうに、
「……どうしたの、茜？」
肩に手を乗せて問い掛けた。
「……大丈夫、何でもない」
「ならいいけど……」
そうは言ったものの私は動揺を繕って教室へ向かった。
今までにこんなことはなかった――
しかしその繕いはすぐにほずれることになる。教室に入って自分の机に座ろうとした時だ。
私が目を瞠(みは)っているとその視線に気づいたようで、
「……あれ、さっきの人だっけ？　同じクラスだったんだ」
照れくさそうな本人はついさっきぶつかった相手だった。隣の席のようだ。
「……あっ、さっきはごめんなさい」
「いや、こちらこそ」
彼は薄く笑って手を振った。端(はた)から見ればラブコメみたいな展開だが今の私にはそれどころではない。

私は信じられなかったのだ。彼にはまるで――心が見えなかったからだった。

＊

新クラス内の空気はあちらこちらで知り合い同士がこそこそと会話しているところもあったが全体的には重たい静寂が教室を支配していた。あちらこちらで目線が交差するこのちぐはぐしたような感じは得意としていない。

しかしどうしようもないからだ。携帯をいじっていれば暇人だと思われかねないし、ならば机に伏せていれば不健全そうに思われる。音楽プレイヤーで曲を聴いていれば何か気取ってると思われてしまうだろう。

そういえばさっきだってトイレから出る時だって下級生に小さく笑われた。

だから何もせずぼーっと周りを見渡すのだがそれでも目が合ったときの気まずさは一種の後悔を生む。

一言で済ますと彼は人識過剰。自覚はしているが物心着いた頃からの癖はこの身にしつこくこびりついていた。

一人静かに溜息をつくと携帯が震えた。メールが来たらしい。差出人は唯一の部員の皆川（みなかわ）からだった。

今日の放課後、相模原先生が部室来いってさ。部活動紹介の準備とかそういうのやるらしい。

「特に部長の平岡君には頑張ってもらわないとねー」とか言ってたぞ（笑）

部活動紹介……アレか、とばかりにまた一つ溜息をつく。来週の入学歓迎会で行われるアレだ。新入生全員の前に出て紹介する役な

んて務まるものか。
ところで彼の所属している部活はこれといってパッとした印象は受けることもないであろう、天文気象部である。存在もあやふやで大半の先生は「地学部」と間違って覚えている始末だ。
部員も彼と先程メールを送ってきた皆川の二人だけでまさに崖っぷちの廃部寸前だ。
去年は誰も入部せずに始まり文化祭が終わると先輩が退部して二人になった。その先輩らは今は卒業してもう居ない。
恐らく天気部（天文気象部の略称）存続のために顧問の相模原先生は気合いが入っているような予感がした。メール本文からその熱気が伝わってくるようだった。平岡とはこの本人のことだ。
このままでは廃部になる――
去年まであまり意識していなかったのに、進級してこんなにももどかしく感じるとは思わなかった。
それは多分平岡が人識過剰であることも由来していた。

＊

入学式は中学校までは親と来ていたが高校にもなれば話は違った。二つ上の姉はそんなことなかったと言う。
別段不服なわけでもないけれども流石に男は入学式に一人で歩いて行け、という親は他に居るのだろうか。
両親が旅館を営んでいるとこういうことになる。なんにしろあの気丈過ぎる母だ。女将（おかみ）を務めて十年は経ち威厳も尚更である。
父も父であまりに寡黙過ぎてそんな口うるさい母に何も言わない。家庭を優しく見守るという感じでもなく家庭に興味なんて持ち合わせてないんじゃないかと思うこともある。
まぁ僻（ひが）んでいても仕方がないことだしそもそも今に始まったことでもない。そういう風に前向きに受け止められるので良しとする。

帰りは姉の自転車に乗って帰ればいい。
車道では新入生を乗せた自動車で渋滞が起こっていた。見られてる気がしてむず痒いような気分になったがこの際やけくそだ。張り切って歩いてやる。
するとなかなか進まない車同士から向こう側に一人の人影が垣間見ることが出来た。よく見ると同じ学校の制服を着た女子が歩いている。……一人で。
なんだ、似たような奴も居るもんだな。　心で呟きつつその姿を見ようと体を伸ばしてみたがやはり車のせいでよく分からない。分かったのは紺のスクールバックを肩から提げていることぐらいだった。
諦めて前を向き直るともう高校の校舎が姿を現していた。S高の屋上には天文台らしきものがあって印象に残る。
校門付近では随所で腕章を着けた係の生徒らが腕を回したりしていた。
そこで何となくまた反対側を振り返ると横断歩道の向こうに例の紺のスクバを提げた女子が赤信号に立ち止まってこちらを見ていた。振り向いたので気づいたらしく目が合った。
もう少しよく見ていたかったが信号が青に変わって彼女が歩き出したので慌てて振り返った。

＊

兄弟というのはしばしば比較の対象に置かれる。彼の場合も然り。いつも「兄はこうだったのに……」と言われてきた。
出来る限り兄とは違う高校に進みたかった。だがどうしてもここに合格しろと両親が譲らなかった。だから受けて……入学した。
それは兄が多大な影響をもたらしたと言われるS高。生徒会長だった兄は当選後様々な改革を邁進（まいしん）していったという。

このことに両親が鼻高々になったのは言うまでもない。
今度はお前の番だぞ。
三つ違いの兄はそう言い残して大学に進学した。また自分にとっては必要もない期待を背負わされた。
そうして今、S高の入学式に居る。
「皆さんご入学おめでとうございます。生徒会の安房涼子です……」
生徒会からの挨拶で名乗った安房涼子……　確か兄が有能だと語っていた。
「……そして去年、S高の校風は大きく変化を遂げました。前生徒会長、村崎淳志先輩の下……」
兄め。ここでもか。
弟、征志はどうしようもなかった。

＊

「明日はえーと、午前中は実力テストやって、午後は……」
式が終わって気まずい雰囲気の中教室に戻り、ほどなくして始まった帰りのHRでは担任から明日の日程の確認が行われた。
いきなりテストか……とこのS高の勤勉さには舌を巻く思いだった。流石県内有数の進学校だけはある。
そんなことよりも多くの生徒は外の様子が気になるらしかった。ぱらぱらと雨が降り出していたのだ。
せっかくの入学式なのに……と落胆するわけでもなくただひどくならないように願うばかりだった。生憎今日は傘を忘れてしまった……
ふと足元に置いたスクールバックに目をやる。この中に折り畳み傘が入っていればいいのに、とありえもしないことを考えて妙に切なくなった。

ＨＲが終わる頃には雨は本降りとなっていた。
昇校口では大勢の父兄らが傘をさしつつ待っていたために湿気がかなりこもっていた。一刻も早くこの場から抜け出したいところだ。
傘は持っていないが雨宿りしている余裕はなかった。早足で雨の中を進む。冷たい雨が制服に染みていった。
学校を出る。立ち止まっていると惨めな気持ちになるので校門付近の赤信号だった横断歩道は無視して通り過ぎた。
余計なことは考えない。重たく濡れたスカートがピンと張るぐらいの大股でツカツカと歩いた。
「おい、ちょっと……」
そんな掛け声が聞こえた気がした。
「待ってくれよ、」
「はい……？」
振り返るとそこに居たのは自転車に乗った男子。小さい折り畳み傘を片手に持っていた。
「これ使えよ。チャリこいでて邪魔になるし」
傘さし運転は確かに危ない。とはいっても……
「いいです、悪いし……」
「そう言うなよ、ほら」
無理矢理押し付けてきた。
「いいですって！　あ、ちょっと――！？」
「それ返さなくていいからー！　ちゃんと使ってくれよー！　途中で捨てんなよなー！」
そんなことを叫びながら自転車に乗った彼はまるで傘の呪縛から放たれたかのように疾走していった。
「……どうしよ、これ」
渡された傘をしげしげと眺めていると取っ手のところに名前を見つけた。佐上正弘。多分、サガミマサヒロと読むのだろうが思わず吹き出してしまった。
「変な人」

声にして呟く。嵐のようにやって来て嵐のように過ぎ去っていった彼はこの重大なミスに気づいているのだろうか……？

微笑ましく感じていた。制服はとっくに濡れていて意味は殆どないことでも彼に言われた通り傘をさして家に帰ることにした。

――いつかクラスが分かったら返しに行こう。

森野奏（もりのかなで）の足取りはゆったりと落ち着いたものになっていた。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n1629ba/

アンカースクール

2012年1月4日02時30分発行